

鷹渡る

かとう
加藤 ゆき(学芸員)

タカの渡り

秋を表す季語に『鷹渡る』という言葉があります。この『鷹』とは、渡り鳥として南へ移動するタカ、または冬鳥として北から渡来するタカを指します。これまで日本で定期的に確認されているタカは17種、これらの多くは繁殖地と越冬地との間を往来する季節的な移動をします。この季節的な移動を『渡り』といいます。

国内では40年ほど前から、春季と秋季の渡り時期に様々な団体や研究者等によってタカのカウント調査(日毎に確認した種や羽数を記録する調査)が各地で行われてきました。その結果、渡りのピークは年によって異なること、地域や時期によって観察できる種は様々であること、春季と秋季とでは別ルートを進む種もあり、秋季のほうがまとまった羽数を観察できることが明らかとなりました。

近年は、その調査結果をほぼリアルタイムで見ることができているウェブサイトもあります。有名なのは、『タカの渡り全国ネットワーク(Hawk Migration Network of Japan)』、この他に各地の研究団体や観光協会、ビジターセンター等でも情報発信をしているところがあります。

バードウォッチャーの中には、タカの渡りを心待ちにしている人も多く、特にまとまった羽数を観察できる秋季には観察会が各地で開催され、大勢の参加者でにぎわいます。渡りをするタカは、

サシバをはじめハチクマ、オオタカ、アカハラダカ、ハイタカ、ツミなどで、複数の種が同時に見られることも珍しくありません。これらのなかで、本州中部で一番数多く観察されるのは、サシバでしょう(図1)。

日本の里山で子育てをするサシバ

サシバは日本では本州以南に夏鳥として渡来し、東日本では里山環境、特に谷津田や谷戸と呼ばれる水田や畑、林が入り組んだ環境を好んで利用することが知られています。一方、西日本では、里山だけではなく、周辺に水田がほとんどない山地帯等でも生息、繁殖することが確認されています。立木や電柱、杭にとまり、ヘビやカエル、ネズミやモグラなどの小動物を探し、見つけたら地面に飛び降り襲いかかる行動を繰り返します。

本州中部では4月から5月にかけて繁殖をはじめ、主に水田や小川に近い林の針葉樹に営巣をします。2~4卵を産卵し、抱卵期間は約1か月です。ヒナは生まれてから5週間ほどで巣立ち、しばらくは巣の周りでくらしていると考えられています。そして、9月から10月にかけて成鳥とともに群れをなして南へ渡り、日本の南西諸島や東南アジアで冬を越し、翌年の3月から4月にかけて繁殖地に戻ります。

サシバは里山で見られる身近な鳥として親しまれてきましたが、近年、関東南部で生息数が激減し、他地域でも減少傾向にあるとされています。環境省による繁殖分布調査の比較でも、特に関東以西で生息確認メッシュ数の減少が顕著であることも明らかとなっています。そのため環境省レッドリスト2020では、絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種)にリストアップされています。里山環境の減少に加え、農薬等の影響による餌動物の減少、渡り途中での風力発電用風車タービンとの接触事故、越冬地である東南アジアの環境悪化が個体数減少の要因として考えられています。

渡りの名所

このように地域によって状況は異なり

ますが、繁殖期のサシバを見るのは難しい状況になりつつあります。一方で、渡りの時期には、渡り途中の個体をルート上でほぼ確実に観察することができ、全国には、タカの渡りの名所が数多く存在し、なかでも愛知県伊良湖岬や長野県白樺峠が有名です。

近年、筆者が訪れている白樺峠には、信州ワシタカ類渡り調査研究グループが主体となって整備を進めた『たか見の広場』と呼ばれる観察場所があり、秋になると全国から大勢のバードウォッチャーが集まります(図2A)。観察適期は8月下旬から11月上旬にかけて、多いときには1日に数千羽ものタカが見られます。サシバとハチクマ、ノスリが大半を占め(図2B-F)、渡りのピークは、サシバとハチクマは9月中旬から下旬にかけて、ノスリは10月に入ってからです。ちなみに、2023年9月に訪れた時には、ちょうどピークの日にあたり、早朝から夕方まで飛来が止まらず、サシバとハチクマを合わせて3,000羽以上も観察できました。

ひたすら待つのがタカ見のお作法

この広場を訪れる目的は人それぞれです。撮影を目的として一眼レフカメラに巨大な望遠レンズ、大きな三脚を携えてくる人が多く、少数ですが望遠鏡や双眼鏡を使ってのんびりと観察をする人もいます。遠足の小学生がタカの渡りを観察していた時もありました。

しかし、ここに行ったとしてもすぐにタカを見られるとは限りません。いつ飛んでくるかわからないタカを待っている間、多くの人は鳥談議に花を咲かせます。日よけテントをはってお茶を楽しむグループや周りの林で動き回るホシガラスやゴジュウカラを観察する人、黙々と編み物をする人など、広場では思い思いに過ごしています。

ところが空に黒い点(タカ)が見えた瞬間、広場に緊張が走り、話し声はひたりと止みます。正体を突き止めるべく双眼鏡や望遠鏡をのぞく人、シャッターチャンスを逃すまいとカメラを構える人も



図1. サシバの渡りを紹介したサントリー愛鳥キャンペーンの広告。原画は蕨内正幸美術館が所蔵。タカ柱を背景に、立木に止まったサシバが非常に印象的。サントリーホールディングス(株)の愛鳥活動ウェブサイトより。
URL: <https://www.suntory.co.jp/eco/birds/>

います。タカが近づくと緊張は高まり、上空をタカが通り過ぎている間、響くのはカメラのシャッター音とタカを称賛する声だけです。そして彼らが飛び去ると緊張が解け、写真を見せながら感想を伝えあったり、識別の結果や特徴を話したりと、再びにぎやかになります。

筆者の広場での過ごし方は、待ち時間の間に、種ごとに異なる飛翔形や模様といった特徴を、同行者と話しながら図鑑などで確認します。そしてタカが飛んできたなら、撮影よりも双眼鏡と望遠鏡を使って、じっくりとタカそのものを観察します。空いっぱいには飛ぶタカを観察し、上昇気流によって上空へと昇っていく群れ(タカ柱; 図2G)に歓喜の声を上げ、間近を飛ぶ個体を撮影するのも楽しいのですが、頭の上を低く飛ぶ個体をじっくりと観察、一羽ごとに異なる模様や行動を見られるのも、この魅力だと思います。喉もとの嚙嚕を大きく膨らませたハチクマは、近くでハチの巣を見つけて食事を済ませたのでしょうか。「風切羽

がぼろぼろのサシバは、この先どこまで渡っていける?」「下をチラチラと見ながら飛んでいくハチクマには、広場の人々はどのように映っている?」などと考えながら、秋の1日を楽しんでいます。

なお、広場では火気厳禁、ごみのポイ捨て禁止、ペット同伴禁止、山菜やきのこ等の採集は禁止となっています。隅にある仮設トイレはチップ制、少額硬貨を忘れずに持っていきましょう。大勢の人が利用する場所なので、マナーには気を付けて楽しみたいですね(図2H)。

タカの渡りを見に行こう!

一般的に飛んでいる鳥を見つけ、種を識別することは難しく、特に色や模様、翼の形が似通い、はるか上空を飛んでいるゴマ粒のようなタカの識別は困難を極めることもあります。観察地に詳しい人がいる場合は、「サシバが来た」だとか「ハチクマのメスが飛んでいる」などと教えてもらえる時もあります。しかし、多くの場合はひたすら自分で探し、種を同定

するしかありません。そのため、識別に自信のない人は、タカの渡りを見に行くのを躊躇(ちゅうちゅう)するかもしれません。そんなときには、各地で渡り時期に合わせて開催される観察会に参加するをお勧めします。経験豊富な観察会のリーダーからタカの識別ポイントや見分けのコツを分かりやすく解説してもらえます。望遠鏡や双眼鏡などを貸し出してくれる団体もありますので、初心者にも最適です。思い思いの場所で秋の風物詩ともいえるタカの渡りを楽しんでみませんか。

参考文献

- 樋口広芳編, 2013. 日本のタカ学 生態と保全, 東京大学出版会.
- 環境省編, Red Data Book 2014 - 日本の絶滅の恐れのある野生生物- 2 鳥類. ぎょうせい.
- 信州ワシタカ類渡り研究グループ, 2003. タカの渡りガイドブック, 文一総合出版.



図2. A: 白樺峠にある『たか見の広場』では飛来するタカを正面に捉えられる。B: サシバの成鳥。腹の横斑が特徴。C: サシバの幼鳥。腹の縦斑が特徴。D: ノスリ。E: ハチクマのオス成鳥。F: ハチクマのメス成鳥。雌雄や年齢により虹彩の色や斑紋が異なる。G: 上昇気流に乗って上空へと昇っていくサシバの群れ。H: マナーを呼び掛ける看板。A・H: 加藤ゆき, B~G: 重永明生撮影。